麻生原のキンモクセイが満開（麻生原）

うたごよみ　～霜月～

米納三雄 選

【短歌】

猛暑日を共に過ごせし朝顔は種を残して枯れてしまえり　内田乃武子

うすべににコスモスの花映ゆれども秋雨に濡れて花首かしぐ　井上ユリ子

南風は祭り太鼓の音運び涼しく吹けり十五夜月夜　上村　かず

異常なる暑さ気にすることもなく藤崎大祭の飾り馬行く　吉永由紀子

村祭り老若男女集まりて唄や踊りで夜は和みゆく　上村やす美

治療室出て来て肩の力抜く老いたれどまだ生身の証し　内山タミエ

一面にたわわに実り広がれる稲田ぞ台風来ぬこと祈る　緒方　明美

猛暑日の打ち止めの雨降りしきり蛙も足を伸ばし跳ねおり　赤星　延子

閻魔様どうか地獄へやらないで彼岸の墓参を忘れし吾を　塚原　暁益

朝は猛暑夕は重ね着するほどぞ秋分の日に季節は変わる　本田冨美子

畦道に緋の色映ゆる曼珠沙華沈む夕日に溶け合い燃ゆる　松本ぬい子

敬老の日に孫よりの「祝寿茶」ほどきて入れて呑む茶の旨し　森田　房恵

この家の家族となりて良かったか聞いているのよ子猫のモラン　渡辺　幸士

【川柳】

【祭り】

神楽舞う神官の腰今日は伸び　林　雅之

花祭り世界の花が競い合う　坂口　政子

伝統の祭り支える子が足りぬ　成松　松枝

お囃子の調子に合わせ馬躍る　古閑チヨミ

豊作でも農家厳しい秋祭り　布田　愛子

【手】

もう遅いあの手この手の思案顔　緒方　瑞枝

徘徊の姑の手悲し帰り道　北　仁子

過ぎし日を思い出しては手を摩る　楠井かをる

炎天下十指忙しく田草取る　伊豆野ヤエ

【老い】

敬老の杖を貰って老いを知る　福田　清子

老いたれど負けてはならぬ心意気　道上キヌ子

同級会　その老いの差を語り合う　内村　邦炎

老いて行く友に自分を振り返る　渡辺　幸士

【俳句】

病（や）む床に耳を澄ませり虫の声　堀田　孝恵

下草へポトと栗落ち風動く　田端　慶子

過ぎし日の思い出褪（あ）せし夏暖簾（のれん）　楠本　美鶴

明日知らず唯ひたすらに秋耕す　本田　信子

御浄土へ友の亡き夫（つま）秋彼岸　古田　幸子

長き夜を古きアルバムに刻忘れ　高田れい子

■お問い合わせ先　町教育委員会公民館事務局
TEL 096-234-1111（内線321）

# ひとの動き（敬称略）
9月11日(土)～10月10日(日)

birth お誕生おめでとう

住所	氏名	性別	保護者
田口	宮崎 悠里（ゆうり）	女	武 仁
白旗	岡本 琉愛（るあ）	女	真 一
白旗	岡本 海勢（かいせい）	男	至 央
大町	田上 湧翔（ゆうが）	男	満
糸田	小林 佳穂（かほ）	女	健一郎
横田	緒方 美南（みなみ）	女	智 一

marriage ご結婚おめでとう

	住所	氏名
夫	世持	志垣 竜太
妻	熊本市	田中 理沙
夫	豊内	北里 雄秀
妻	美里町	樫山 春香
夫	長崎県	山嵜 裕司
妻	田口	大島 弥恵
夫	西寒野	小島 純一
妻	御船町	松本 美鈴
夫	西寒野	井上 幸介
妻	益城町	村重 好美
夫	熊本市	佐藤 祐樹
妻	下横田	村上成美恵
夫	横田	上野 将司
妻	船津	仲原 未暁
夫	豊内	宮地 亨介
妻	熊本市	小坂 優子

condolence お悔やみ申し上げます

住所	氏名	年齢	世帯主
中横田	中村キクヱ	89	信 広
大町	池上 哲郎	77	浩 幸
緑町	渡邉マスエ	94	マスエ
横田	鳥井日出夫	55	ヒサエ
横田	山村 一人	69	ミツエ
府領	山﨑 髙資	59	髙 資
下横田	丸岡スミ子	77	公 生
白旗	金柿 義人	82	義 人
上早川	本田 隆章	87	サツ子
上早川	本田眞智榮	87	眞智榮
田口	岩崎 輝子	88	和 典
田口	布田タツ子	64	千輸憙
津志田	北川 正幸	74	正 幸
田口	宮川シキ子	86	シキ子
大町	長谷川明子	79	實

Data 甲佐町の人口・世帯数

項目	数	増減
男	5,404	△4
女	6,146	7
計	11,550	3
世帯数	4,184	△2

平成22年9月30日現在

〔町史編さんだより〕

甲佐の歴史を紡いで
～町史編さんだより(26)～

「陣ノ内館跡」と豊内地域

町史編集委員 稲葉 継陽（中世）

8月に私は町生涯学習センター講演会において、「陣ノ内館跡」についてお話しました。今回は、講演の中から、特に注目すべき点を記しておきましょう。

第一は、「館跡」遺構の規模と地理的位置についてです。巨大な空堀を有する「館跡」の遺構は、近世大名の労働編成による普請を考えさせる規模があり、その位置は、益城郡における緑川交通の最重要地点にあたります。「館跡」を最終的に改修したのが、豊臣政権の下で益城郡を領有した小西行長であった可能性を指摘できると思います。宇土城・麦島城など、行長の城は海上・河川交通の要地に構築されており、「館跡」も緑川の船運によって河口部の都市である川尻・宇土との連絡が容易で、上流地域で生産された年貢米を搬出する起点としても、行長の拠点たるにふさわしい位置にあります。

第二は、豊内が「館跡」の城下町たる性格を有していたのではないかという点です。寛永9（1632）年に派遣された幕府上使衆、そして翌年の幕府巡見使は、ともに豊内に宿泊していました。寛永10年の熊本藩領内における宿泊地は、山鹿、高瀬、内牧、高森、大津、どいの内、小川、宇土、八代、日奈久、田浦、さしき、水俣、大野（日向境）でした。これらの多くは、戦国時代の城下町や宿場です。さらに、豊内には中世寺院の存在を伝える「法念寺」、「安養寺」なる地名が残り、大量の中世の五輪塔が出土しています。かつて上豊内は宿・寺院・墓域を備えた町場的性格を有していたとみられ、だからこそ藩主の休憩所（やな場）が設置されたのではないでしょうか。以上から、16世紀末期における豊内の城下町的性格が想定され、城が廃絶した後も17世紀中葉までは町場的機能が残っていたのではないかと考えられるのです。

このようにして、戦国時代における甲佐町の歴史的特質を描くことは、町史の大きな課題です。

▼『甲佐町史』編さんに関するお問い合わせ先
町社会教育課町史編纂係
☎096-234-3310

町場的な機能があったと推測される豊内

編集後記

この1年で、急速に広がっている造語は「だだ漏れ」。何のことかピンとこない人も、大丈夫。BB（ブロードバンド）整備後の来年からは、本町でも楽しむことができます。

「だだ漏れ」とは、携帯電話などのカメラで、現場の映像をインターネットでライブ配信すること。仕事場やイベント、はたまた日常生活などを世界中の人がありのまま公開し、現場で起こっている「今が旬」が、そのまま画面に映し出されます。

テレビのような編集も予定調和もない映像が、今やなぜか大人気。世界に向けて情報発信したいという現代の願望が、一つの形になって表現されています。

インターネットは、情報を消費すること以上に、情報を発信することで威力をもっとも発揮するもの。あなたが甲佐町から発信するとしたら、どんなことを発信してみますか？。（と）